

「木下蔭狭間合戦 壬生村の段」報告

平成十七（二〇〇五）年五月三十日、四月に新築開場したばかりの小野記念講堂（小野梓記念館地下）において「COE公開講座「浄瑠璃」」が開催され、竹本綱大夫・鶴澤清二郎両師による「木下蔭狭間合戦」（九ツ目）壬生村の段（以下「壬生村」）が演奏された。21世紀COEプログラムの古典演劇研究（人形浄瑠璃文楽）コースによる公開講座としては四回目にあたるが、平成十五（二〇〇三）年十二月一日（二回目）の綱大夫・清二郎両師による「木下蔭狭間合戦」（七ツ目）竹中砦の段（以下「竹中砦」）に続く企画として位置づけられるものである。

「木下蔭狭間合戦」の浄瑠璃史的価値や、素浄瑠璃であっても今この作品を演奏することの意義などについては、内山美樹子氏の論考「木下蔭狭間合戦竹中砦の段」二〇〇三年、演奏と研究」（演劇研究センター紀要V）に語り尽くされているので、ここでは今回の「壬生村」に限り、その経緯と当日の報告を行いたい。

文部科学省が公募した「21世紀COEプログラム」に対して、早稲田大学が「演劇の総合的研究と演劇学の確立」のテーマで応募しこれが採択され、演劇研究センターが創設されて、プログラムがスタートした。四つあるコースのひとつ「古典演劇研究」のテーマの中に「日本演劇の復元的研究」があげられているのを知った時、まず私の脳裏に浮かんだのが「壬生村の段を綱大夫師に早稲田で語っていただけないだろうか」ということであった。

綱大夫師は自著『織大夫夜話』（昭和六十三年）などで、入門後まもなく「壬生村」を稽古してもらったことがあるという話を何度かされていた。「竹中砦」が東風時代物の大曲であることは四代竹本津大夫・六代鶴澤寛治の放送（昭和四十年）録音からも十分伝わってくるが、「壬生村」の方は、丸本を読んだだけでは、かつて強盗殺人を犯した老人の悔悟とその因縁で孫娘がむごたらしい死を遂げるという、陰惨極まりない話としか受け取れなかった。文楽では大正九（一九二〇）年以降、八十年以上も上演されていないのも無理もないことだと思っていたし、前受け（客受け）のしない、いわゆる皮肉な世話場なのだろう、という程度の認識しかなかった。

しかし、綱大夫師が何度も「自分はこの曲を知っている」と言われるのは、私たち

が想像できない何かがこの曲にはあるのではないかと、読むだけでは気づかない面白さがあるのではないかと。そしてなによりも、十代の時に教えられた曲を六十年の歳月を経て始めて公の場で語るといふのはどういふことなのだろうか、芸の伝承ということを考える絶好の素材ではないか・・・と思うようになってきた。そのことがずつと心に引っかかっていたので、COEプログラムの一員として参加させていただけることになった時、真っ先にこの「壬生村」のことが思い浮かんだのである。

平成十四（二〇〇二）年秋、実際にCOEプログラムがスタートした直後、綱大夫師にまず電話でこのことをお願いしてみたが、後日いただいたお返事は「まず「竹中砦」から」という、嬉しいけれどもちょっと意外なものであった。ひとつには綱大夫師のお話（演劇研究センター紀要Ⅲ「文責飯島満氏」）にもあるように、「竹中砦」を語ることは師匠である先代綱大夫師の「遺言のようなもの」であったから、まず亡き師匠との約束を果たしてからとお考えになったこと、そして翌十五年五月末の国立文楽劇場（大阪）で催される「文楽素浄瑠璃の会」で取り上げることを考えておられたためであったと推測する。お蔭で幸いにして（文楽劇場の半年後ではあったが）早稲田でも「竹中砦」を語っていただけたわけで、より完成度の高い演奏を記憶と記録に遺すことができた。

もちろん「竹中砦」のお話しを進めている時から「次は是非「壬生村」を」というお願いを何度も続けていたわけだが、なかなか日程の調整がつかず、ようやくその一年半後、念願の「壬生村」を語っていただく機会が実現したわけである。今回はさらにタイミングよく、文楽劇場の「文楽素浄瑠璃の会」で封切りした翌々日に早稲田で演奏していただけることになった。大阪ではいつにも増して多くの方が来場されたことと、綱大夫師の「壬生村」を是非聞きたい」と思っていた方が大阪にも大勢いらっしやったことが、なによりも嬉しくまた心強いことであった。

二

「壬生村の段」は、明治期までは文楽でもしばしば上演され、また寄席などでも時折演奏されていた曲であったが、大正九年御霊文楽座での上演を最後に、文楽での上演記録は途絶えてしまう。昭和に入ると、少なくともプロの演者による演奏の記録は見

出せないし、レコードや放送の記録もない。

ただ、戦後、この段が注目されたことが一度だけあった。昭和三十三年（一九五八）年三月、二年前に開場したばかりの道頓堀文楽座（後の朝日座）における因会・三和会合同公演において、「通し狂言 石川五右衛門」が上演された。誰もが知っている盗賊・石川五右衛門の話の短い時間で分かりやすくという制作意図のもと、発端として五右衛門の出生にまつわる強盗殺人を短く見せる「芥川堤」（九分）、少年時代の猿之助（後の藤吉・久吉）と友市（五右衛門）の出会いを描く「矢矧橋出合」（九分）、そして「壬生村」（四十三分）を経て、成人した二人が再会する「足利義輝志賀館」（二十分）と続き、最後に歌舞伎でお馴染みの「南禅寺樓門」（十分）を新文楽座自慢の舞台機構（大ゼリ）を駆使してスペクタクルに見せる、という公演である。

この時の番付には「鶯谷樗風作 西亭作曲」と記されている。鶯谷樗風（本名・武。一八九一〜一九八二）は、大阪文楽会の事務局長として文楽の脚色や演出を担当し、文楽協会設立後は制作部長、資料室長を勤めた。西亭は言うまでもなく「曾根崎心中」などの作曲を行った野澤松之輔（一九〇三〜一九七五）である。当時のプログラムに付いている「床本集」でも分かるように、全編鶯谷のオリジナル台本で、古典作品のように見せながら実はいわゆる新作文楽に分類されるべきものである。

ただ「壬生村」だけは、原作「木下蔭狭間合戦」の台本をベースとして、上演時間を短くするために全体が四分の三程度に刈り込まれ、文章も分かりやすく書き換えられている部分が少ない。序盤、友市が五右衛門と分かり治左衛門が歎くところまではほぼ原作をなぞっていく形だが、中盤から話の展開が少し変わってくる。この公演の時に出演者に配付された「台本」（手書きでカーボン複写したもの。吉田文雀師旧蔵）が文楽劇場に保存されており、「空うそ煙吹くばかりなり」の後に次のような注記がある。

（注意）原作には、この処にて親子の争いから誤つて小冬の咽喉をつく。そして因果のおそろしさを聞かすが、舞台も暗く、浄瑠璃も憂鬱になるので、小冬は生かしておく、その方が明るくてよいと信ずる。

台本の表紙には「鶯谷樗風脚色」と記されているので、鶯谷自身の文章とみてよからう。この後、台本は大きく原作を離れて、小冬は殺されることもなく最後まで生きている。小冬の生死とは関係なく、治左衛門は二十三年前の芥川での強盗殺人の話を始め、という筋立てである。

戦後の文楽は、戦争によってその経済的基盤を失い、また一座が後の因会と三和会に分裂するという未曾有の危機に直面した。昭和三十年代は、文楽（とくに因会）が、道頓堀文楽座という新築劇場を拠点として、起死回生を図った時期であった。「曾根崎心中」を嚆矢とする近松物の復活、「おはん」「春琴抄」など近代小説を文楽化した

文芸路線、そして「お蝶夫人」に代表されるいわゆる赤毛物など、大阪市民から見られることのないよう、積極策に打って出た時期であった。中幕に舞踊（所作事）を置く歌舞伎の狂言建てを取り入れるような試行錯誤を繰り返しながらも、「暗くてわかりにくい」文楽をなんとか「明るく分かりやすい」ものにしよとなりふりかまわず邁進した。結果的に観客動員は増えているし、近松物の復活をはじめとして、文楽が新しいものを創造していく力をまだまだ失ってはいないことが証明されたわけなので、決してマイナス面だけではないが、「壬生村」のような皮肉な世話場がこのように書き換えなければ上演できなかったことに、この時期の文楽の混迷が象徴的に現れているような気がする。

この時「壬生村」を勤めたのは、その頃の三和会の第一人者であった十代豊竹若大夫（当時七十一歳）と相三味線になったばかりの二代野澤勝太郎（当時四十七歳）である。若大夫はおそらく「壬生村」を（稽古はしなくても）聞き知っていたであろうが、それとは異なる台本を新たな節付けで語らなければならなかったのである。

治左衛門の懺悔話の冒頭「丁度この様な雨が降つての」の「したあーした」は、その直後からメリヤスが入ることもあつて非常に印象に残る語り口であるが、鶯谷本ではこの部分はそっくりカットされている。東京・本牧亭で開催されていた「豊竹若大夫会」で若大夫が「壬生村」に言及した時、この「したした」のことを言っていたという内山美樹子氏の証言、当然この時の公演を聞いておられた現網大夫（当時織の大夫）師も「したした」と語っていたような記憶があるとお話しされているので、鶯谷本にはなかったが演奏段階ではこの部分を語ったのかも知れない。書き換えられたりカットされた他の詞章についてはともかく、この「したした」を語らない「壬生村」は「壬生村」ではない、という思いが若大夫にはあつたのかも知れない。

三

竹本綱大夫師は昭和二十一年（一九四六）年、十五歳で先代綱大夫に入門しているが、入門後間もなく、この「壬生村」の稽古を八代野澤吉弥（一八八〇〜一九五六）から直接受けている。吉弥は、「逆井村」（碁太平記白石噺）やこの「壬生村」のような洗練された物語を得意としていた六代竹本弥太夫（一八六六〜一九二四）の相三味線を三十三歳代で勤めた人で、大正二（一九一三）年十二月、前名の八助時代に、大阪における非文楽（彦六）系最後の牙城であった近松座で弥太夫の語る「壬生村」の三味線を弾いている。単にこの曲を知っていたというだけではない、いわば舞台の裏付けのある芸を持っていた人であった。綱大夫師は他に「どんぶりこ」（楠昔噺）や「秋津島内」（関取二代鑑）などを稽古してもらったという。入門してほとんど間もない太夫がこういう皮肉な曲を稽古するというのは素人にはなかなか理解し難いことであるが、プロ

の太夫や三味線弾きではさほど珍しいことではないらしい。ところが綱大夫師は、その後、本公演はおろか素浄瑠璃でも「壬生村」を語る機会を得ないまま今日に至った。綱大夫師以外、現存の文楽の太夫でこの曲を伝承している人は一人もなく、まさに廃曲寸前であった。

綱大夫師が公開講座当日舞台でお使いになった床本は、六十年前の稽古でも用いたもので、本文末尾に「明治辛未（四年）」とあり、「鶴澤勝右衛門」（三代か）の署名がある由緒あるものである。また綱大夫師自身によつて稽古の際の詞章の加筆や訂正、そして心覚え等が墨や鉛筆で細かく記されている。幸いなことに吉弥最晩年のものと思われる弾き語りの録音（前半「鉦や哀れを添へぬらん」までで、しかも録音状態のさわめて悪いものではあるが）が残っていて、これも参考にしながらの復曲作業となつたことである。綱大夫師ご自身は「稽古の時のことはなにも覚えていない」と言われていたが、何度も床本を読み、当時の書き入れを判読するうちに、意識してはいなかった記憶の奥底から語りが浮かんでくるようなことも一度や二度ではなかつたそうである。

四

公開講座の当日は、一年半前の「竹中砦」の日同様の豪雨であつた。桶狭間合戦の因縁というしかない。にもかかわらず開場前から大勢の聴衆が詰めかけ、開演（午後二時）十分前には空いている席を探すのも難しいほどで、階段状になつた客席の通路に直に座り込む学生達で一杯となつた。演劇博物館側の配慮で、会場外にモニターを置いて、それで聞いておられた方も少なかつた後から聞いた。新・小野記念講堂の「柿落し記念公演」の掉尾を飾る催しとして恥ずかしくない「入り」であつた。

主催者を代表して秋葉裕一演劇博物館副館長の挨拶の後、内山美樹子教授の解説（約三十五分）があり、休憩をはさんでいよいよ「壬生村」の演奏となる。

オクリが済んで、三代大隅太夫が名人団平の稽古で苦しんだ（木谷蓬吟「文楽今昔譚」という「守り袋」は、丸本や稽古本には「表具」とあるが「文弥」で語られる。生活のために祇園町に身売りされる小冬の不安気な独り言から始まるのは、この曲が難曲たるゆえんである。綱大夫師は決して子供の声は得意ではないが、ハラを締めて丁寧に語り、かえつてそれが哀れさを誘い、これから始まる一段の尋常ならざる展開を予感させる。

五右衛門の出になる。「されば」と低い音で語られ、劇が動き出す瞬間に聞き手は立ち合う。兄妹の対面は、すぐ後に父親（治左衛門）が出てくるので比較的あっさりと言語られ、むしろこの部分は清二郎師の三味線が先に回つて足取りを付けているように聞こえた。綱大夫師の五右衛門の詞は巧く、スケールと得体の知れない人物像をす

に造型している。ここまで約十五分。

そこに治左衛門が帰ってくる。足許のおぼつかない盲人が、娘のことを気に病んで沈痛な表情で歩いてくる姿が目につかぶようである。最初の詞「なんの、なんの」が秀逸。五右衛門が戻ってきたと聞いて「ヤアヤア」と驚くところは、吉弥の弾き語りや聞きとかなりオーバーにやっていて、前の「なんの、なんの」との落差の面白さがあるが、綱大夫師はむしろ不審そうに「ヤアヤア」と語り、僧形で帰ってきたと聞いてからの「ヤア、ヤアヤア」を嬉しそうに語る。治左衛門の心の動きをリアルに語っていくので、聞き手には知らず知らずのうちに綱大夫師の思い描く治左衛門像がはっきりと見えてくる。

再会を喜び合う家族の描写が続き、聴く側も少し単調になりかける頃、傾城屋の出になる。三味線の合の手が済んで「駕籠の棒鼻」から傾城屋の出であるが、その前の「爪木とくとく折からに」からすでに独特のノリ間になつている。ぶつぶつに切れない、つながりのある浄瑠璃になつているのは、語りも三味線も息が途切れていないためである。傾城屋は「忠臣蔵六段目」の一文字屋を思わせる。初めは事務的に話を進めていた傾城屋が二百両を手にしてからの変化が楽しく、浄瑠璃が実に生き生きとしていく。といつて卑俗に墮ちないのは、この曲に手垢が付いていないのと綱大夫師の芸そのものに品格があるからであろう。

傾城屋と駕籠が帰つた後、浄瑠璃は居すまいを正す。五右衛門の正体が判り、「熱湯の涙胸に突かけ膝突かけ」は治左衛門の驚きと嘆きを、手強い三味線とともにアクセントをつける。「真人間になつてくれ」と治左衛門が五右衛門に意見するところはそれ以前の語り方とは違い、情愛にあふれながらも筒一杯に語り込み、聞き手を惹きつけて離さない。ここの治左衛門の詞はこの曲の中でおそらく最も難しい部分と思われ、今、これを語れる太夫は綱大夫師を措いて他にはあるまい、と思わせるほど秀逸であつた。義太夫節は詞だということはこの時ほど痛切に感じたことはない。したがって「生きる望みもない」と治左衛門が刀で自害しようとする所も、丸本を読んだだけではいささか唐突に思われた箇所であつたが、綱大夫師の語りに引き込まれてここまで付いて来ている聞き手にとっては、ごく自然に聞こえるのである。

自害しようとした刀が誤つて小冬を刺してしまう。二十三年前の今日、治左衛門が犯した強盗殺人の因果話は、先の意見とともにこの曲の聞かせどころの双壁である。前述したような「したーした雨が降つての」の詞の面白さ、その直後からメリヤスが入つての述懐は、綱大夫師の語りにかかると、治左衛門という人物の背負つた業の深さのようなまで感じさせ、納得させられてしまう。これを「芸の力」というのであろう。小冬の絶命、治左衛門の嘆き。そんな家庭内悲劇には一顧だにしないかた五右衛門は、治左衛門が出てきた系図書きを読んで自らの出生の秘密を知り、天

子の地位も狙おうと決意する。ここまで約五十分。語り込まれた浄瑠璃を聞き手が聞き込むことの楽しさを十分味わったはずであったが、この曲のもうひとつの面白さはこの後の十五分にあった。

「昼は疵持つ」で五右衛門の手下たちがやって来る。詞ノリの妙味、躍動する詞の面白さが途切れることなく押し寄せる。「挟箱」を「はさーんばあこ」と音で言つて偽公家らしさを聞かせる。「なんぢや分かりやせんがな」と盗人仲間が問い返す件は、もちろん丸本にはない、いわゆる入れ事ではあるが、三代鶴澤清六の本（大阪市立中央図書館蔵。大正五年九月御霊文楽座上演時のもので、太夫は二代豊竹古靱太夫）後の山城少掾）にも記されており、当時の舞台でも語られていたことが分かる。

装束を替えて偽公家になるところの三味線は、手数が多く派手なだけでなくスケールを感じさせる手厚い弾き方。治左衛門が五右衛門の母が遺した笛を吹くと太刀が跳ね、水煙があがる様を不気味な「コハリ」で表現する。このあたりは三味線の独壇場で、聞き慣れない面白い手（旋律）もあり、飽きることがない。

今回は、綱大夫師の床本にしたがつて、いわゆる素浄瑠璃用の台本となつたので、「うんとつけに反り返るを」の後、すぐに「見捨て、歩む石川が、心は雲居上見ぬ驚、世々に伝へし釜が測、尽きせぬ御代こそ久しけれ」と段切りに語つて収めた。

早稲田での演奏は六十五分十五秒。前々日の大阪より一分少々伸びているが、間延びした感じは全くなく、むしろいっそうメリハリがついて締まった印象で、文字どおりの決定版を語つて下さつた。

五

今回は素浄瑠璃なのでこの台本に拠つたが、人形が入る文楽公演では、当然丸本どおりの展開になる。前述した三代清六の本を元にして、人形入りの上演を想像してみよう。

「うんとつけに反り返るを」で「行列」のメリヤスになり、その間に大道具（屋台）が上手に引かれ（引道具）、公家に化けた五右衛門一行が家の中から出てくる。「はうはう這ひ出る立派の武士」で下手奥に大名駕籠が現れ、中から謎の侍（久吉）が出て「土に低頭蹲る」で平身低頭する。「下馬緩急」と言つてその前を五右衛門一行がゆっくり通り過ぎ（咎めも柔和温順に）で「大三重」。「寛然として行き過ぎる」で一行は下手に退場する。治左衛門が息を吹き返し、「兄やい、兄やい」と呼びかけながら不安そうに一行を見送る（このくだりは清六本にはない）。後に残つた侍が下手を見送りながら舞台中央まで来て、「ハテナア」。この詞で床が静かに回り、柝を刻むことなく静かに幕が引かれる。

端場は朱の存在を知らないで今回は割愛したが、短いながらも過不足のない台本

である。貧しい暮らしをしているこの家にまず古道具屋と借金取りが押し寄せ、借金返済のために雛道具を値踏みし分け取りにする。古道具屋が情にもろい人で、風炉（釜）だけを娘のためにと残して行き、それが後の「湯立飯」に引き継がれ、また五右衛門の釜煮の暗示へとつながる。雛道具を値踏みするところの三味線の手を工夫し、後半の「面癖悪い銭屋の手代」を面白く語れば、端場とはいえ、かなりやりがいのある場になるであろう。小道具として御殿雛（御殿飾り）の道具一式を揃えなければならぬ。幸いにして昭和三十三年の「石川五右衛門」の舞台写真が何枚か残っているので、これを参考にしながら、最後に舞台での人形の姿を想像してみよう。

治左衛門は、貧困の中にも自らが犯した罪を悔やむ日々を送る愚直な老人である。喜怒哀楽をストリートに表現するので、かしらは平作（伊賀越道中双六）や徳太夫（楠昔嘶）等の役で使われる「武氏」であろうか。盲人であること、しかも生まれながらではなく、最近目が見えなくなったということも忘れてはいけない。小冬は十三歳なので大人と子供の間。綱大夫師は「嬢景清八嶋日記」の糸滝のつもりと言われる。五右衛門は昭和三十三年の舞台写真を見る限り、鼠頭巾を取ると「寺子屋」の松王のような「百日」のかづらで、かしらは「文七」。僧形から公家に化けると束帯姿となり、全くの真任（奥州安達原）である。久吉は唐織の切袴に五三桐の紋を付けたいつもの姿で、かしらは「検非違使」であろう。

六

ほぼ毎月行っているCOE研究会では、公開講座を前にして四月二十六日と五月二十四日の二回にわたつて、上演台本の検討や実際の舞台の想定等を行った。公開講座後の六月二十八日には、近藤美織氏が雛道具の「銅釜」について、埋忠美沙氏が黙阿弥の「小猿七之助」を中心とした因果物語について、伊藤りさ氏が石川五右衛門をめぐる説話について（「演劇研究センター紀要Ⅷ」）、それぞれ短い発表を行い、実説、伝説、演劇作品としての先行作、影響作、そして舞台上の演出について考えた。また九月十三日には綱大夫・清二郎両師に再度早稲田へお出でいただき、今回の「壬生村」についての詳しいお話をうかがう機会を得た（報告は「演劇研究センター紀要」本号（文責 飯島満氏）参照）。

ハードな日程のなかで、確かな伝承に裏打ちされた最高の演奏を聞かせて下さつた両師に、改めて御礼申し上げる次第である。

（文責 桜井弘）

【床本】「木下蔭狭間合戦」壬生村の段

井の字窓、洩る笛の音は、あやしの賤が軒に咲く、桃の天々生ひ立ちし、土百姓の小娘に、鼻の跡も顔になき良い器量とて村中が、可愛ひがるので親は猶、子に目の見へぬばかりかは、皆目の内障病、さぞな迷ひも深からん。

明けなば節句宵日から、飾るひいな道具でも、見倒し屋の太次郎兵衛、空財布肩に掛取二三、門口覗いて、

「内に居さしやるか。近所へ掛けて来たついでに、ちよつと尋ねに寄りまして」

と、古借銭でも捨て置かぬ、深切ぶり。

「アレ父様、掛取が来てちやぞへ」

「オ、よふこそ」

と治左衛門、出る足元

「ソレ危ない、怪我さしやんすな」

と氣を付くれば、

「イヤ氣遣ひするな。こゝにも早や七八年も暮らした所なれば、なんぼ俄盲目でも、滅多に躓きもする事ぢやない。俺が事は構はずと、皆様茶でも汲んで進ませませい」

「ハイ」

愛想こぼる、程、汲み出す花香、こゝへもそこへも濃い茶、一口吸つて、

「コレ治左衛門殿、こなたは元河内の石川村で、ともかふも暮らした身代であつたげな、この壬生村へござつてから、打ち続いでの不仕合せ。さりとは氣の毒。世に義縁といふ事もある習ひ、また所でも変へて見さつしやれ」

「イヤモ、貧福は銘々の肩づく、所には寄らぬもの。ハテ兩替町に居て銭金に不自由な者も多し、長者町に住んで代々貧乏する和郎もある。皆運が来ぬのぢやてや」

「サアその運といふものは、天にあるげなの。それが手近くにあらふものなら、また買占めをつて運の値が上がるであらふ、ハ、ハ、ハ。さすればこなたも塞がつてある雪隠ぢやまで、運を待つたがよいわいの」

と笑ふて立つを、

「マア待つて下され。いつの節季でも、借銭乞ふて下されぬ程乞はれる百倍猶術ない。なんと物は談合ぢやが、内々の物なんなりと分取りにして、それで消す事はなるまいか」

「サア、こちとらもどふなりとして帳を消し、後の商ひもて進ぜたい。貴様達もそふであらふがの」

「オイ」

「しかしかう見たところが、これもなふても良いといふ様な物も見へぬ身代。いつち役に立たぬはソレその雑道具、それで分散したが良いはいの」

「まずは忝ない。さりながら死んだ嘴があれへの譲り。小冬よ、わりや惜しかるなあ」

「イエ、どふでわしや今の所へ行かねばならぬぢやないかいな。それなりや何の要らぬ物。皆進ませして下さんせ」

「オ、おとなしふよふ言ふた。そのかはり金儲けしたら、これより良いのを父が買ふてやらふぞよ。太次郎兵衛殿、そこへ直し頼みます」

「オツトよし。俺がせり分けてやります。サア、ハ、ハ、ハ。こんな紙糰二夫婦、洪炭塗の紫宸殿。サアなんぼ」

「紫宸殿なら四百ぢや」

「まつと見直したり、振り直して御殿ぢや」

「なら五百に取る」

「オツト五百で、御殿が五助。左兵に左近の桜を渡し、右近の橘宇兵衛へ落し、掛けた土産の調鍋の蓋も梨地の煙草盆、これも碎けて有馬細工の菓子箆、長持戸棚も底抜井戸、皿鉢七輪六枚屏風、破れつゝくる乗物一挺、半挿、組、料理人共、具桶値が出る、琴はつんでん、ころりでしやん、手拍子打盤、算盤メ高、三貫三百三十三文三人へ、分散確かに受け取りました。ホイ、いつち値打物を見落としたいの。一つ籠に銅釜、ア、ま、よ、これはお娘へ進上に、残して置いてさつぱりと、帳面消してやりませよ」

と、余程の損を都から、雑の分散頂きに、北野の方へと急ぎ行く。

鳥丸から真黒な、面癩悪い銭屋の手代、鋭い眼光らして、

「コレ、治左衛門、方々今日済さふとある五十両、這ひ屈んでも持つて来る筈と親方の腹立ち無理やあるまいかの」

「ハイ、イヤモお道理でござります。十一年後に倅めが取つて走つた五十両、料簡強い旦那なりやこそ、私が証文でこれまでのご宥免、それも去年の極月で十年の年切れ。またその上に今日迄御容赦に預かつた御恩の金」

「コレ知れてある事を長々言はずと、手短か金を渡したがよいわいの」

「ハイ、左様ならば御苦勞ながら、鳥原の桔梗屋までお歩みなされて下さりませ」

「ム、往てどふするのぢや」

「サア、娘を勤め奉公にやります筈で、目見得もさせて置きましたれば、呑み込んで貰ひ、先借して渡しませよ」

「オ、それに違ひない事なら往きませよ」

「それは御苦勞。小冬よ、必ず頼んだ様にしてくれいよ」

「アイ」

「そんなら往て来るぞよ」

「アイ」

「ハテ埜の明かぬ。早ふござれ」

と忙しなふ、せがみ立てられ盲人の、杖柱より頼りなる、子を傾城に鳥原の、轡を

さして出でて行く。

年端いかねど孝行を、守り袋は形見ぞと、肌身に添へて亡き母に、逢ひ見る思ひ独り言。

「コレ母様、怪我にでもわしが身に疵付けたら、やつぱり親の体に疵付けるも同じ事、と言はしやんしたけれどな、ひよんな事はおやまになつたら沢山に、指でも切らにやならぬげな。それが定なら何とせふ。またその上に親方が抓つたり叩いたりするといなあ。わしや怖ふてならぬとも、いやと言ふたら父さんの為にならぬが悲しさに、売られて行くは行くけれど、必ず案としておくれなえ」

と、言ひつ、袖のひた濡る、涙流れの里はた、地獄の様に思ひ取り、子供心ぞ道理なる。

されば三界に宿り定めず、樹下に木の実を甘んずる木食上人、抖擻行脚と志し、伏屋が門に立ち休らひ、打ち鳴らす鉦の音。

小冬はふつと心付き、

「ほんに月の二日々は大事の命日と、仏壇の前で父さんが笛を吹かしやんす。わけてこの二日

は祥月命日ぢやげな。ドレ入れませふ」

とかい立てど、届かぬ棚の端鏡、漸く取つて庭に下り、

「進ませませふ」

と差し出だす。

その手を外からちつと取り、

「それが名は小冬といふか」

「アイ。そふはそふぢやけれど、こちや根から見知らぬ坊様。コレ手を放して下されいの」

「オ、二つの年別れたれば見知らぬも理り。おりやわれが兄の友市ぢやはい」

「ヤア、そんならお前は兄さんか。わしや小さい時で覚えねど、父様や母様がお前の事を毎日言

ひ出して、大抵や大方の案じではなかつたに、よふまあ戻つて下さんした。嬉しいわいな」

と立つ居つ、手の舞、足のはき解き、撫でてやるやらさするやら、如才泣き寄る親身と親身。

迎りぢろく見回して、

「ムウ、古郷の石川村に居られた時よりは、猶さんすいな暮らしと見へるが、親父や母者は達者なかい」

「アノ母様は去年死なしやんして、それから父様も目が見へぬはいなあ」

「ム、頓死でもしられたか」

「イ、エ、お前があんまり戻らしやんせぬ故、それを苦に病んでな」

「ム、それで死なれたか。ハア親父の眼病も、そこらあたりの事である。シテどつちへぞ行かれ

たか」

「アイ、留守でござんす」

「ム、それなら戻られる迄かうしてもゐられまい。ドレ、ム、ゆるりと寝て待たふ」

と取り出すは、油染みたる切りかぶた、

「オ、この枕も、へ、馴染みぢや」

と、仕馴れし業か押入へ、隠す菅蓑櫛笠、提げて一間へ入りにける。

「この父様は何してぞ。早ふ戻つてくれたがよい。遅い事ぢや」

と待つ子より、

待たる、親は憂き事を、目には見ね共心には、満つる涙を押し包み、萎れ我が家へ立ち帰る。

「ヤア戻らしやんしたか。嬉しい事ぢやわいな」

「なんの、なんの、嬉しからふぞい。みすく奈落へ沈む勤めを、いそぐいそぐとして見せる心根が、いぢらしいわい、いぢらしいわい」

「イ、エ、兄様が戻つてござんしたによつて、嬉しいのぢやわいなあ」

「ヤア、ヤア、何ぢや、兄が戻つて来たか。ソ、そりやどの様な形で」

「アイ、衣を着てな、鉦を叩いて」

「ヤア、ヤア、坊主になつて戻つたかい、アノ坊主になつてかいわいな」

「親父殿、戻つてか」

と、明くる障子の内くつるぎ、髭剃み上げて大胡座。

声をしるべにすり寄つて、

「ヤレ友市かいわいな、兄かやいな、懐かしかつた、逢ひたかつた、逢ひたかつたはいわいな。よふ戻

たもつたの。マ、何よりは息災で」

「こなさんも達者で。ア、久しぶりで逢ひますのふ」

「イヤモ、久しぶりの段かいわいな。十一年がその間長の年月を、夜も昼もよふ案じさしたなあ。

その代はりにこれから片時も傍離しやせぬぞ。モ、モ、どつちへも往てくれなよ。そしてまあ、

よふ得道しやつたのふ。イヤモ、小さい時はきつい手習ひ嫌いであつたが、出家になる程の事

なれば、手もよふ書く様になつたであらふし、そしてアノ四角な字も読めるか、寺持ちにでも

なつたか、ド、ドレ、どの様な僧柄ぢや、撫でて見よふ」

と体中、探り廻して、

「コリヤどふぢや。三衣は着ながら頭巾の下、坊主どころか、兄、月代さへ刺つてないぞよ」

「ハテ、優婆塞なれば、髪はある筈でござんすわいのふ」

「ム、行者様の様なものぢやな。コレマこの様に親子兄弟が揃ふにつけても、思ひ出すは婆の

事。今息引き取る際迄も、そなたの事を言ひ死に、去年の秋、死にやつたぞよ」

「サア、そふぢやげにござんすの」

「オ、そふぢやわいの。それから俺もこの様に、生まれもつかぬ明き盲目」

「それはさぞ、不自由にごんじよ」

「サア、不自由な事いなの。何が緻緻の働きはならず。ありもせぬ物を売食ひしてあるが今での

業。ソ、ソレ見や、何処もかも行燈蹴破つた様な内になつたであらふがの。オ、それで気が

付いた。コリヤ小冬よ、兄はひだるからふぞよ」

「サア、そふ思ふたによつて、雛様のこの釜で」

「オ、ソレ、湯立飯にしたがよい。ド、ドレ、手伝はふ」

と言ひ柴の、爪木とく、折からに。

駕籠の榎端門口へ、ぬつと入れさす傾城屋、

「治左衛門殿、先程は逢ひました。約束なれば迎ひに来た。奉公人を連れて往にましょかいの」

「父様、もふ行かねばならぬかへ」

「サア、金は受け取るし、証文には判をする。やりとむのふても、やらにやなるまい」

「サア、行くは行くけれど、あんまり急なでびつくりして、どふやら腹が痛いわいなあ」

「オツとお娘、案じまい。腹が痛くば吉野太夫が禿にして、まだ二年は見習ひさせ、お客さん

へのお勤めは、ア、コレマさせまい程に」

と誑すにぞ、

「ヤコレ親父殿、俺が戻つたからは、あれを売るにや及ばぬ」

「ア、コレ、そのな坊様、マ異な事を言ふ和郎ぢやはいの、異な事を。及ぶふが

及ぶまいが、金渡して証文が済んだりやつちの代物。コレ、証文があるからは、及ぶ所で及

ばして見せるぞや。たとひ又金立てふと言やつても、元金ではふいかぬ、ならぬ事ぢや」

「ドレ、その証文おこせ」

「エ、なんぢや証文おこせ。ソ、それ見やしやれの。あんまり横合ひからごてごてと

言ふて貰ふまいかいの、憚りながら」

「請け出そふ」

と、くはらり投げ出す二百両、

「お寺の金なら正真に、へい、コリヤ違ひはあるまい。このま、で貰ふて帰ります、

帰ります、帰ります、帰ります、帰ります、帰ります、帰ります、帰ります、帰ります、帰ります、

と明駕籠に、乗せた小判の耳たぶも、さつても厚いと親子共、呆れて詞なかりしが。

治左衛門、居直つて、

「コレ兄、そなたはマアたんと金持つてゐやるのふ」

「イヤモ、日本国の金は皆俺が物でござんすわいの」

「ヤア、コリヤ娘、今朝われに預けて置いた物は、何処にあるぞよ」

「アイ、そりやこ、にござんす」

と、取り出し開く人相書、

「年の頃は二十三、背の-highさは五尺六七寸。その次は何と書いてあるぞ、読んでみい」

「アイ、色白にして鼻筋通り」

「オ、そふちや。苦みある面体、左の耳際に鐘疵あり。この盗賊の張本、石川五右衛門といふは」

「オ、そりや俺が事ちや」

「チエ、」

と魂消る釜の湯に取り落としたる絵姿の、爛れいりつく大焦熱、熱湯の涙胸に突かけ膝突かけ、

「エ、おのれは情けない。とうとう大盗人、大盗人、大盗人になりおつたのぢやナア。三つ

で付いた癖は八十迄とやら。六つ七つの時分からた人の物を欲しが性。その時分は相応に

暮らした故、召し使ふ女子男もあつたれど、とかく和子様が手が長い、イヤ用心の悪い内方

ぢやのと、後には奉公人も得勤めず。折檻すれど聞かばこそ、人中見せたら直らふかと、十二

の年奉公にやるとそのまゝ、ム、取りぶけりぢや。コリヤヤイコリヤ、今日娘を売つた五十兩

も、皆おのれが首代ぢやはい、おのれが。それになんぢや、勿体ない。大枚の金を、土砂の

様に持ち悩む罰当たりめ。配符の廻る程なれば、モ大それた事仕出したに違ひはない。スリヤ

モ、千万だら悔やんだとて、返らぬ事ではあらふけれどナ、そのマア屈強な体を後手に括り上

げられ、浅ましいちんば馬に乗せられ、京洛中を引き回され、親や妹に恥か、すが、エ、本

望かやい。コリヤヤイ、今でも根性直すなら氣遣ひするな。その罪はこの親が引き受

けて、名乗つて出ても助けて見せふ。子の為に死ぬる命、獄門襟厭ひはせぬ。真人間になつて

くれ、ヨ。ヨ、ヨイヤイ、ヨ。アレ、心ない草や木も、撓むれば直る物ぢやぞよ。親程に子が

親の事、思ふ物なら何のマア、こんな、こんな、こ、こ、こ、こんな事にはなりやせまい。

さりと根性直してくれ。これぢや」

と手を合はせ、泣き焦れ共

いかな事、ど太い煙管横ぐはへ、空うそ煙吹くばかり。

「ム、ぐつ共すつ共言はぬのは、聞き入れぬのぢやな。よいは、この上はどふなりと、勝手にしをれ」

と親子中、破れ行李の底打ち古びし小合口、すらりと抜く手に

取り付く小冬、

「ヤ、ヤア、娘か、止めなく、止めてくれな。これから一日でも生きてゐる程、あいつが成

敗に逢ふを待つよふな物ぢやはい、あいつが」

「イエ、それでも死なしやせぬ。兄様止めて下されいのふ」

「親父殿、ム、何するのぢや」

「オ、止める気は根性直すか」

「ハテ、役にも立たぬ世迷言」

「ム、そふ言や死ぬる」

「ソリヤさ、ぬ」

「エ、放せやい」

「イヤ放さぬ」

「エ、放せ」

と、引き合ひ捻ぢ合ひ、

と、もぎ取り捨つる剣先に、

当る娘が因果の様、

「南無三寶」

と五右衛門が、抱きしむれば、

「兄よ、娘はなんとした、どふしたやい」

と撫で廻る、手先に触る合口は、

無惨や小冬が胸先に、

忽ち親は半狂乱、

「ヤア、こりやマアなんたる怪我災難、なんたる怪我災難に逢ふ事ぢやぞやい。この様な

事のない様にと、願ひ折るぢやないかいの。神や仏も胸欲な。聞こへませぬ、聞こへませぬわいな

「親父殿、こりやもふ所詮、助からぬわいの」

「エ、その様な事言はずと、どふぞ助けてくれやい。こんな非業で殺したら、死んだ婆への言

ひ訳は、なんとならふぞ悲しや」

と、正体更に泣き入りて、や、伏し沈みたりしが。

何思ひけん立ち上がり、涙ながらに仏壇の、内に備へし漢竹の、笛と一軸取り出でて、

「さても、恐ろしい人の恨み。まつこの通りに報はねば、ならぬ因縁因果経。これ見てたもれ」

と手に渡し、

「ア、昨日今日の様に思へども、早や二十三年跡の今月今日、丁度この様なした、雨が降つて

の、物凄いな夜道を芥川へ掛かる所で、癪に苦しむ旅の女子。行きか、つて見捨てられず、さす

る肌金財布、見るよりふつと悪念の、起こつたも何故ぞ。大恩受けた親方の困窮が救ひたさ。

どふぞ貸して下されと、やつ、返しつする中にも、見咎められてはなるまいと、胸欲にも斬り殺

し、逃げふとしたれば疵口から赤子の泣き声。取り上げて見たれば、月も延びたか、遅しい男

の子。ヤレ不憫やとその場ですぐに発起心。ア、ひよんな事しました、堪えて下されませ。その

代りこの子はわしが子にして、天晴れ成人させましょと、亡者にきつと誓ひを立て、守り育て

たはわれぢやはい。最早罪障消滅し、母御の恨みもあるまいと思ひ暮らせど恐ろしや。天道

様の憎しみにて月も代らず日も代らず、つひに娘が身に報ふ、因果の懺悔調ふる横笛、その一軸。

母御の形見でござるぞや。サアかふ打ち明かせばこの親父は、こなたの為に仇敵、切りなり

と突きなりと、殺して下され、殺して下され。こりや娘、必ずわれは死ぬなよ」

と、身も浮くばかり歎くにぞ、

小冬は苦し紛らして、

「ム、父様、氣遣ひさしやんすな、死にやせぬ、死にやせぬ。死にやせぬけれどな、ひよ

つと私が死んだなら、母様と一つの所へ埋んで欲しい。コレ兄様、父様ともふせり合はずと、

仲良ふして下さんせ、頼みます。わしや父様がいとしい、大事にかけて」

と言ふ内も、次第々々に色変はり、手足を締め四苦八苦、

「コリヤヤイ娘、娘やい」

と、呼べども声の立て兼ねる、惜しや蕾を散らせしは、花盗人とも壬生寺の、鉦や哀れを添へぬらん。

一心不乱五右衛門は、一卷とくと読み終はり、

「コリヤコレ大内が系圖書。スリヤ俺は百姓の子ではなく、九州大内が落し胤か。ム、さすれば先祖は琳聖太子、コリヤこれ迄の望みを變へにやならぬわい。元より大名へ、小さい奴、武将の望みもよしにせい。これから望むは万乗の天子ならば、なつてもみよふかい。ならずば一生盗人暮らし。イヤコレ親父どん、一日暫時の恩もない誠の親より大切なこなたを敵と思はれふかいの」

「ヤ、ヤア、何と言ふぞ。そんならやつぱりこの俺を、真実の親と思ふてくれる気か」

「サア、盗人程義理引きに、苦をやむ者はこんせぬわいの」

「オ、よふ言ふてくれた、忝ない。忘れはせぬ」

と、縫り付き、肉親絞る嬉し泣き、理りせめて殊勝なり。

昼は疵持つ足柄金蔵、表から、

「頭、頭」

とひそめく声、

「オ、足柄か。遠慮にや及ばん、這入れ」

「オツ」と心得振り返り、招けば

後から三上の百助、堅田の小雀、教多の同類、

蔵を素人に廣商人、くろめる贓物かたげ込む。

五右衛門手下を見廻して、

「コリヤ堅田よ、この中に小鮎の源五郎めがおらぬほどおつたぞい」

「さればい。こな様の配符が廻つたによつて、お頭の代りになつてばらされに行く、昨日名乗つて出おつたからは、頭の上気遣ひない。なんとマア出かしおつたぢやこんせぬかいの」

「ム、あいつならそふである。ハテ気な奴ぢやなあ」

「ヤコレ、あればかりぢやない。まさかの時になつたら仲間のは、皆こな様の命に代はる気ぢや。サアこれ見やしやれ」

と脱ぎ捨つる、姿も髪も一様に、揃ひ勝れし強盗なり。

中にも金蔵逸鼻立ち、

「自慢夕べの働きは昼の内から眼張つた。十七八の振袖は姉小路橋屋といふ三味線屋へ、とてちんなしに踊り込み、娘押さへて取つて来た。小袖の衿数三十八、黒塗手箱にこぼれる程、コレ

と差し置けば、

と差し置けば、

と差し置けば、

と差し置けば、

と差し置けば、

と差し置けば、

「コリヤヤイ、雀も百も踊つたか」

「イヤ、忘れてもこの後に公家の所へ這入るなよ」

「成程雀が囀る通り、位と暮らしがお揃ひならぬ冠冠。こんな装束白丁烏帽子、被つた代物お頭のお気には入らぬ」

と真面目顔。

「シテこの外に、何にもなかつたか」

「ほんにそれよ。この様な結構な箱の中に、難しい字の書いた汚い紙が這入てこんすはいの」

「オ、そりや一束一本繪紙である。ド、ドレ、へおこせ」

と押し開き、一目見るより舌打し、

「ハテよい物が手に入つたな。コリヤコレ足利家へ天子から預けて置かれた太政官の御正印返

せとある勅書。ム、『呉羽中納言氏定承はる』、ヤコ、が仕事ぢやてなハ、、、。この中納言

氏定に俺がなつて足利家へ入り込み、太政官の印を受け取るといふはとこでそれがなはい、

へ、ない筈ぢや。その印はとくより紛失してある噂、そこで言訳がならぬから迷惑しをるは、

そこを付け込んで大金にするか、たゞし義輝に腹切らすか、どちらでも旨い仕物。よし又付きが

先へ廻つて行き損なふてからが元々ぢやてな。ドレ、髭でも刺つてお公家様になつて見よふかい」

「オ、ならんせ」

「ソレ仕丁が三人」

「アイ、よこんす」

「諸太夫」

「オツト、よし」

「雑掌」

「よこんす」

「挟箱」

「えつ、なんでこんす」

「挟箱」

「何ぢや分かりやせんがな。お頭、なんでこんすぞいの」

「エ、挟箱ぢやわい」

「オツト、よし」

「ドリヤ、装束付けよ」

と、不敵の仕業。

聞くに堪らず治左衛門、歎きを忘れ齒を噛み鳴らし、

「エ、恐ろしい工み事。ならぬ、さ、ぬ」

と這ひ寄つて、縫り留むる

まとはしの、その上の絹薄紫、

赦さぬ親は恩愛に、悲しみ怒り獅子形の、

石の帯仕にまた取り付き、腕先取つて

突き放し、有紋の冠厚額隠し置いたる管簀より、取り出だしたる時絵の太刀、履く浅沓の音高き、

殿上人はお頭殿、手下も気儘に髪目上下、白丁烏帽子、作り済ませし勅使の粧ひ。

「コリヤヤイコリヤ、その様な横道な事してそれが真直に行かふかいやい。コリヤこの位牌の亡

者にきつと請合ふた事ぢやもの、コレこの形見の笛の音を、せめて母御の言葉と思ひ、どぶぞ

留まつてくれいよ」

と、心を込めて吹く笛は、凄凉として冴えさゆる、

声に感ぜし水龍の、啼くか忽ち帯たる太刀、

はためき渡ればあたりの小川、水勢激して朦朧と、打ち煙るこそ怪しけれ。

「ム、スリヤこの太刀の」

「イヤコレお頭、今の不思議は、ありやマア何でござんすぞいの」

「ハテ、何ぞのあれであらふぞいやい。打やつてサア来い」

と、出づるを

やらじとむしやぶり付く、止むるも闇雲霞の当て、うんとつけに反り返るを、

見捨て、歩む石川が、心は雲居上見ぬ驚、世々に伝へし釜が濁、尽きせぬ御代こそ久しけれ